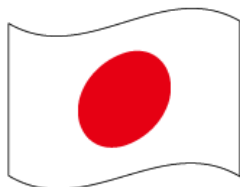


日中友好交流事業 あいでのみ



福島の高校生3人 から始まった活動

福島・上海の高校生が「両国の課題」について学びあうため両国の高校生同士で1から創りあげる取組として2013年に1期が始まりました。2019年の9期まで毎年、夏に福島交流、冬に上海交流という形でお互いの地域を行き来し、国を越えて友達になり、友好を深めてきました。



コロナ禍に入った9期

交流を重ねる中でOBOGも増え、中国メンバーの日本留学生も増えてきていました。しかしながら2020年から始まった新型コロナウイルスの影響により2020年度はお互いの国を行き来する交流の中止が余儀なくされました。そうした中でも、引き継いだメンバーたちを中心に、今だからこそできることとして、東日本大震災や沿岸部を訪れた学びを情報発信冊子として中国メンバーへ届けました。

続くコロナ禍で2021年度は 中止。再開した10期

長引くコロナ禍の中で2021年度は活動休止し、2022年度ようやく活動再開となりました。海外からの旅行者に向けては規制も緩和されつつありますが、今年度は高校生たちの安全・健康面を考慮し海外での交流ではなく、次年度からの交流再開に向けて全国の先進事例を学び「福島を知り、考える」を中心に活動してきました。



高校生メンバー紹介



今年度再開した10期メンバーは福島県内の高校生5名です。中国にルーツを持つメンバーも多く、多様なバックグラウンドを持つ仲間が集まりました。

■あさか開成高校

- ・王 子軒 2年生
- ・宗方 舞優 1年生
- ・柳沼 愛心 1年生

■福島高校

- ・菅野 愛子 2年生
- ・伊藤 真優 2年生

主な活動

10期活動内容

あいてみの活動方針である「高校生自身が1からプログラムを作り上げる」ため、オンラインでの打ち合わせを何度も重ね、1月に熊本県でフィールドワークを実施しました。

■9月～10月

メンバー募集

■11月

メンバー決定、オリエンテーション、オンラインでの打ち合わせ

■12月

フィールドワーク先決定、情報収集、各種手配

■1月

1月6日～9日で熊本県へフィールドワーク
情報発信冊子作成、送付



共通するキーワード 熊本県



” 風評被害 ”

” 震災復興 ”

” 語り部 ”

私たちが考えた福島県と熊本県の共通するキーワードがこの3つです。水俣市で起こった水俣病を起因とする「風評被害」。熊本地震からの「震災復興」。そしてこうした経験を次世代へ語り継いでいく「語り部」。福島と比較しながら巡ってきました。



水俣でも起こった風評被害

1950年に起こった水俣病では原因が特定されるまで長い時間がかかったため、水俣から遠い地域だけではなく近隣住民の間でも発症した方は「近くによると感染する」と言われることも多かったと伺いました。全国的にも水俣産という名前だけで避けられることもあり、改善してきたのは90年代に入ってからだそうです。福島でも同じような風評被害が起きました。改善されていくには長い年月がかかる事、一つずつ正しい理解を広めていくことが重要だと感じました。

水俣市立水俣病資料館

まずは水俣病を正しく知るために水俣市立水俣病資料館を訪問しました。この資料館は水俣病の歴史と現状を正しく認識し、悲惨な公害を繰り返さないという願いと、貴重な資料をまとめておくことを目的に設立されました。

■水俣病とは？

水俣湾で取れた魚などを長期的、そして大量に摂取したことによって起こった中毒性中枢神経系疾患です。市内にあった大きな工場である新日本窒素水俣工場（現:チッソ）にてアセトアルデヒド酢酸を作る過程でできたメチル水銀化合物が工場排水に含まれていたことで、水俣湾の魚介類を汚染、魚などの体内で凝縮されたものを摂取した周辺住民に大きな健康被害をもたらしました。健康被害の大きさからも4大公害病と言われています。



復興と風化させない取組み

災害から2年半が経ち、当時の災害の様子は一目見ただけでは分かりませんでした。事前にYouTubeや球磨川水害伝承記というHPで川が増水していく様子や、氾濫後の町中の様子などを学習していましたが、地名や建物などを照らし合わせてやっと分かるというくらいに、外から見ただけでは分からず、災害が起きたことを知らなければ、普通に通り過ぎてしまったと思います。

復興を経て一見課題がなくなったように見えても、住民の方にとっては防災や災害が起きた時の対処など、どう風化させずに伝えるかという課題は、福島と共通していると感じました。

令和2年7月豪雨：人吉市

人吉市では令和2年7月に大規模な水害が発生しました。7月3日から4日にかけて1時間に30mmを超える雨が激しく降り続き、球磨川流域では甚大な災害が発生しました。

被害は大きく河川の氾濫などによる人的被害だけではなく、堤防の決壊や家屋などの浸水被害、倒壊、道路損壊、橋の流出など多くの被害が発生しました。50名の方が犠牲になり、浸水や倒壊などで約7400戸が被害をうけ、停電、電話やインターネットの回線が切れ、情報収集が困難になりました。河川や土砂災害も広範囲で起こり、交通が分断されました。



自然を生かした観光資源の活用

噴火という災害が発生する可能性のある地域で、なぜ人が住み続けるのか？という問いが生まれました。福島でも沿岸部の津波被害があった場所に住み続けている方々がいらっしゃいます。災害が起こるリスクがある一方、観光資源としても魅力的な自然にあふれていることも関係しているのではないかと感じました。

災害について正しく知っていくことと同時に、こうした自然の観光資源を活かし、PRしていくことも大事だということ学びました。

阿蘇山噴煙展望公園

熊本県でも有名な観光地の一つ阿蘇山。今回は阿蘇山噴煙展望公園を訪れました。阿蘇山は二重式カルデラで有名な山で、熊本が火の国と呼ばれる所以でもあります。火口見物が名物であるように、地鳴りと共に激しく噴煙を噴き上げる活火山でもあります。現在も、火山ガスや濃霧発生の際には火口付近は通行不可となり、今回の見学時も火山ガスの流れが悪く、近くまで行くことができませんでした。





何度も訪れたいくなる工夫

もともとは軍事産業用に作られたトンネルが、観光資源として活用されているという所に、とても驚きました。歴史資料として活用されることはありますが、このようにイルミネーションや企画展示と掛け合わせることもできるのだと学びました。

また、1度来ただけではなく何度も訪れたいような工夫が多くみられ、観光資源として活用するだけでなく、継続的に来てもらえるにはどうするのか？ということ、活用し始める時点で重要な視点だと感じました。

高森湧水トンネル公園

阿蘇五岳が南に広がる高森町にある、明治時代に軍事産業路線として作られたトンネルを活用したトンネルがメインの講演です。このトンネルは2kmほど掘り進めた際に、坑内で毎分36tもの水が噴き出しました。同時に町内にある湧水8か所が枯れ、水道が寸断されてしまうという事態になったことから工事が中止されました。その後、観光資メー源として活用しようと、全長2055mのうち550mを親水公園として一般開放しました。トンネル内部には様々な展示物やイルミネーション、ウォーターパールなどがあり、観光客を飽きさせない工夫が随所に見られました。



災害からの復旧と復興の一步

熊本地震では県内で沢山の被害が発生し、被災した地域の方々は大変な生活を送られました。そうした中でシンボルと言える熊本城が少しずつ復旧していく様子は復興に向かって頑張る方々の支えとなったそうです。

こうした大規模な災害が発生した地域ではシンボルとなるものが被害を受けることも少なくありません。しかし、そうしたシンボルが復興の支えとなり象徴となることを学びました。福島では何がシンボルとなり人々を支えたのか調べたいと思いました。

熊本城

マインの観光地として外せないと言われる熊本城。加藤清正が当時の最先端の技術と労力を投じたお城が熊本城です。完成から400年、様々な歴史の舞台となってきました。

しかし平成28年に起こった熊本地震により石垣だけではなく貴重な天守閣にも甚大な被害を受け、復旧復興に当たってきました。令和3年4月には全面リニューアルとなり、被災と復旧までを模型や映像などで展示しています。



フィールドワークを通して見つめた福島 学びとこれからについて



“同じところ” “違う所”

フィールドワーク中はそれぞれの箇所を巡りながら、福島について沢山考えました。まったく違う場所を見ている「福島はどうだったんだろうか?」「福島でも活用できるかもしれない」と思いながら巡ってきました。

共通している部分があれば、これは福島と違うなど感じた部分も多くあり、参加メンバーそれぞれの視点でまとめました。

王 子軒

■今回の活動を通して福島と熊本の共通点や、それぞれの相違点があると感じました。共通点はどちらも災害多難の県であるということです。熊本県では水俣病や熊本地震が、福島では東日本大震災、原子力発電所の事故、どちらも大きな被害が出て復興に長い時間がかかります。相違点は同じ地震災害でも復興までの道のりは違うということです。福島が今後どのように復興していくのか?をもっと調べたいです。

■今回の活動を通しての学びは環境を守っていくことは、どんな場所でも共通の課題であるということです。特に水俣病資料館では大きく感動しました。これから、一つ一つ工夫をしながら自然環境にも関心を広げていきたいです。



宗方 舞優

■福島と熊本の似てるところは主に2つあって1つ目は同じような災害を経験してるところです。大きな地震であったり、豪雨やそれによる被害があったなと思います。同じような災害でもそれぞれの場所の大変さがあったと思いますが、これからも復興していく大事な土地として、似ているなと思います。

2つ目は被害を受けた土地に対する偏見や差別は未だあるところです。決して良いところとはいえませんが、誤解が解けた今でも続いてしまう偏見や差別は悲しくも似ているなと思いました。

違うところは復興の早さです。被害の大きさは確かに違いますが、熊本の方が福島よりも若干復興の進みは早いなと感じました。復興が難しい部分が沢山あるはずなのに、感動しました。

■全体を通して自分が思っていたことは違っていたり、今まで見えなかった部分が沢山みえて学校では学べないことを勉強することができました。似たような被害を受けたわたしたちも、後世に伝えていく大切さが知れました。確かに実際に経験しないとどうしても伝わらない苦しさや苦労があると思います、それでも体験した人の声というのは凄く力強く心に残ると思います。東日本大震災からもうすぐ12年が経ち、段々と記憶が薄れていく部分もあると思いますが、幼いながらも経験したわたしたちにも伝えていく力があると思っています。何か機会があればわたしたち自身の声でいろんな地域、後世へと伝えていきたいです。

柳沼 愛心

■わたしがあいてみて学んだことはたくさんありました。

今回は熊本に行きました。熊本県も、福島県と同じ地震災害があり、人々が大変な思いをしたのは同じじゃないかなと思いました。そして、水俣病と原発事故が似ていて低濃度汚染は福島県の共通点という上で象徴的でもあると思います。ネットで調べたんですが、福島で東京電力を救出した手法と、水俣病でチッソを救出した政府の手法の共通点を指摘していました。このことから、水俣の悲惨を見てきたひとたちは「また水俣の苦しみを背負った」と福島を見ていて、共感性があると思いました。あいてみて、資料館などに連れてってもらえて学校の授業では教えてもらわないところなど知れて、勉強になりました。特に、水俣病について良く知れて、当時の患者さんの気持ちなどが分かりました。差別や偏見が起こっていたので人の気持ちを考えてから行動することが大切なんだなと思いました。



菅野 愛子

■共通点では、福島では放射線による風評被害と熊本では水俣病による風評被害の影響で辛い時期がありました。その中でも福島も熊本のみんなはできる限りのことを一生懸命行って、互いを支え合いながら困難を乗り越えてきたことが今回のフィールドワーク全体で感じました。また、地震による被害も両県に大きな損害を与え、今でも直、その跡はあちこちと見ることができます。相違点としては、熊本では公害による影響をみんなが分かるように積極的に発信しているが、福島は復興は進んでいます、それを熊本と比べるとあまり積極的ではないイメージがあります。

■私は以前水俣病を伝染病と思っていました。なので、今回のフィールドワークで、自分の先入観から物事を考えるのではなく、正しい情報を得た上で物事を考えるべきだと痛感しました。私たちは疫病や災害がいつ起こるか分からないが、予防対策を行うことはできます。万が一、それが起きたとしても、嘆いて悲観になるのではなく、地域のみんなを信じて、一步一步確実に歩いて行くようにしたいです。この調べをここで終えるのではなく、もっとたくさんをのこについて調べ、地元の復興や情報発信に役立てるようになってほしいです。

伊藤 真優

■共通点は、周囲からの差別の目を知っている点だ。水俣病も原発による放射線被害も周囲や世間の誤認識から差別が始まった。10年以上経った今もその被害は消えていないという現状を肌で感じる事ができた。相違点は、復興に対する認識の差があるという点だ。福島県は、復興をしている現状をプラスな事としてあまり発信していない。一方、熊本県は、起きた事は受け止めて、これからの生活をどう良くしていくかに意識を持っていっていると感じた。

■研修を通して、疫病や災害は私達の身近にあり、時に脅威となるものだが、起きた時のことを常に考え、生活を営む必要があると感じた。復興地だからといって、悲観する事や隠す事が必ずしも正しくはない。その状況をどう改善していくのかの過程を重視し、未来の学びや制度の最良化に生かしていきたい。その為にもまずは、被害地域の住民の意識を変えなければならないと感じた。これからは目の前の情報を疑い、事実を追求するようにしていきたい。

